札幌大学総合論叢　第18号（2004年10月）

〈論文〉

根を張ることと絶やすこと
——ジャン・マリオッティ『アンセルテーヌ号に乗って』におけるアイデンティティーの探求と植物——

田　中　恒　寿

はじめに

自然は文化と対立する。こう言ってしまえばあまりに単純すぎるが，『アンセルテーヌ号に乗って』（1942年）における両者の対立は，かなり錯綜したものになっている。

最もわかりやすいものは，生命力旺盛なニューカレドニアの自然（十年が百年，道が消滅）と，白人入植者が持ち込んだ文化との対立だろう。ニューカレドニアで生まれたフランス人であるマリオッティ少年にとって，フランスの文化は理想であり，憧れであった。ところが1924年，晴れてフランスに渡ったマリオッティは，逆にニューカレドニアを自分の「祖国」として強烈に意識し始める。彼の創作活動は多くの場合，ニューカレドニアに自分のルーツを求める探索行為としての性格を強く持っていることを指摘しておこう。そこからある種の「ねじれ」が生じてくる。

フランスの文化がマリオッティ少年が憧れる遠い国の理想であるとすれば，ニューカレドニアの自然は彼の身体に染みついた現実であった。少年時の記憶をつむいだ自伝的色彩の濃い長編小説『アンセルテーヌ号に乗って』では，その現実からの脱出願望が大きなテーマとなって現れている。ところが，青年マリオッティがかつてフランスという理想を追い求める代償に捨て去ったニューカレドニアの現実は，小説執筆時のマリオッティにとって，逆に郷愁の対象として，さらにはフランスで根無し草となった自身のアイデンティティーの拠り所として，蘇ってくる。

このような自らのアイデンティティーの探求は，同時に民族のアイデンティティーの探

求とも並行して行われる。それが後にポワンディの連作（『ポワンディ物語』など）として成立することになるのだが，こうしてニューカレドニアの大地は，マリオッティにとって個人的なルーツとして創作行為の中に具現化されるだけでなく，カナック民族の歴史に自らの人生を重ね合わせることによって，いっそう有機的なつながりを強化されることになる。

ニューカレドニアの自然は身体的リアリティーとして，マリオッティの記憶に蘇る。ところが，その自然は，彼の乳母ワッチューマによって繰り返し語り聞かされたお話によってさらに生き生きと肉付けされ，独自の意味を付与された自然でもある。たとえばカナック文化の文脈では，自然は客体としてそこに存在するという以上に，象徴的な意味を帯びて人間存在と分かちがたく結びついている。つまり，マリオッティにとってのニューカレドニアの自然は，文化でもあるのだ。「ねじれ」の原因はこの点にかかっている。

書くという行為によって，マリオッティは自らのアイデンティティーを模索していく。この探求を通じてマリオッティは，自然が物質の単なる延長ではなく，木一本，岩ひとつにも人間の文化が刻印され，豊かな物語が宿っていることを，あらためて確認したにちがいない。創作のごく初期の段階から，人も自然もすべてがひとしなみにエネルギーの連鎖と絶えざる変形にさらされた存在であるという考えを表明している[1]が，これはマリオッティのエコロジカルな感性の一端を示したものとみなしてよいだろう。ところがパリに渡ったマリオッティは，身体のレベルにおいても物語のレベルにおいても，濃密な絆で結ばれていたニューカレドニアの自然と切り離されてしまう。それゆえ，マリオッティの作品はルーツの探求であると同時に，自然との関係性の回復の試みでもある。

小論においてはマリオッティの代表作『アンセルテーヌ号に乗って』を取り上げるが，そこに登場する人々の多くはデラシネ（根無し草）である。彼らはなんとかして自分のルーツを辿りなおし，ゆるぎない土壌に根を張りたいと模索している。ここでとりわけ注目したいのは，登場人物がアイデンティティーを模索する過程で，植物が重要なかかわりをもつ興味深いエピソードがいくつか見うけられるという点だ。

ところで本論に移る前に，まず，日本ではなじみの薄いジャン・マリオッティという作家とその作品について，簡単に説明しておくことも無駄ではないだろう。

マリオッティ（1901-1975）は，葉巻のように細長い形をしたニューカレドニア本島グランド・テールのほぼ中ほどからやや南寄り，東海岸に程近いファリノという村で生まれた。首都ヌメアは東海岸を5～60キロ南下したところに位置している。父はコルシカ人，母はイタリア人で国籍はフランスだ。

ファリノで過ごした少年時代，マリオッティは中央山脈の懐深い自然や，ブルッス（疎

林と草藪による，東海岸に特徴的な植生。都市ヌメアと対比的に用いられる場合もある）での生活をこよなく愛するようになる。この時期は，カナック（ニューカレドニア先住民族の総称）文化へのイニシエーションの時期だということもできるだろう。とりわけカナック人の乳母ワッチューマが語り聞かせたカナックの伝説が，後のマリオッティの文学的創作の源泉となる。

1924年，23歳のときにマリオッティはフランスに渡る。当初，画家として身を立てることを目指したが，すぐにあきらめ，出版社に勤めたりしながら小説を書き始める。第二次大戦ではマジノ線で捕虜になるが，健康上の理由で解放され，その後レジスタンスにも身を投じた。1947年から50年まで，マリオッティは再びニューカレドニアに滞在し，その魅力にあらためて取りつかれる。51年にパリにもどって以降は，死ぬまでORTF（フランス放送協会）に勤めながら，創作活動を続けている。

ニューカレドニアを代表する作家と目され，すでにニューカレドニアにおける古典的作家としての評価は揺るぎがないマリオッティだが，作品のモチーフは大半がニューカレドニアやカナックに由来するものであるとしても，マリオッティの小説や詩はすべてフランス語で書かれている。代表的な作品としては，第二次大戦のころに書かれた『アンセルテーヌ号に乗って』や『ポワンディ物語』などが挙げられるだろう。後者はいくつかの国で翻訳が出されている。

マリオッティの作品群には，自らの少年時代に題材をとった家族の過去の記憶（『アンセルテーヌ号に乗って』など）と，メラネシアの民族的記憶（『ポワンディ物語』，『続ポワンディ物語』，『平穏な日々を求めて』といったコント系列）という二つの軸が存在するとするのは，まず妥当な見方だろう[2)]。しかし，この両者も，結局のところただひとつの目標を目指している。マリオッティの創作行為は，つまるところ，自分がデラシネであるという認識から出発して，自らが拠って立つ確固たる基盤を探求するという行為に帰結できる。彼が自らの根を張り巡らそうと追求したのは，一貫してグランド・テールの大地であった。そこはマリオッティが生まれ育ったところであり[3)]，同時にカナック人の文化が息づいている場所でもある。マリオッティ自身のルーツの探索は，カナックの民族的ルーツを辿りなおすことと，必然的に折り重なってくる。コント系列作品は単なるカナック伝説の収集ではない，民俗学的な観点からよりもむしろ文学的観点から読まれるべきだ，とするガッセの指摘[4)]は，我々の主張を補強するものだ。

マリオッティはこの二つの軸に沿った探求を一貫して試み，後に代表作とみなされることになる二作品を，39年，42年と相次いで世に問うた。前者が『ポワンディ物語』であり，後者が『アンセルテーヌ号に乗って』だ。この二作はしたがって，鏡の両面のように

補い合い，照射しあっていると言えるだろう。

それでは本論に移って，『アンセルテーヌ号に乗って』に登場するデラシネたちのアイデンティティー探求の物語を，植物のイメージを中心に読み解いてみよう。

第1章　デラシネたち

『アンセルテーヌ号に乗って』の登場人物の多くはデラシネ（根無し草）である。その定まりのない存在様態は，タイトルにも登場する難破船の名前アンセルテーヌ（不確実）号によってもすでに暗示されている。アンセルテーヌ号はフォー川がサンゴ礁の海に注ぐその沖合いに座礁した難破船の残骸だ。実際，本土の周りをサンゴ礁でぐるりと取り囲まれたニューカレドニアはもともと座礁する船が多発する海域で，撤去することもかなわず，なれの果てを波風に曝しつづける難破船も数多い。

そして，小説のデラシネたちは，個人としてデラシネである場合と，社会集団としてデラシネである場合とに分類できるだろう。白人入植者によって壊滅されたカナックのナンディーヌ族が後者のケースにあたる。

1．ジャン＝クロードとカミーユの場合

前者の代表格はジャン＝クロードとその姉カミーユだ。二人は白人入植者の家庭に生まれた。二人がデラシネであることを意識し始めたのはおそらく小学校においてであろう。小説冒頭から描かれるタノ小学校での授業の様子は，通奏低音のように何度も繰り返して登場してくるが，そこで女教師のブビニャン先生は，フランスで製作された教科書の世界を絶対の真理として子どもたちに教え込もうとする。たとえば四季の運行について教えるとき，それはニューカレドニアの四季ではなく，あくまでフランスの四季なのだ。

> Quand je parle des saisons, je parle des saisons « vé - ri - tables » et non du temps qu'il peut faire ici! Décembre est le mois de la neige et juillet celui du soleil! (85)[5]

そのため，子供たちにとって親しいニューカレドニアの自然は，間違った現実，虚像でしかなくなってしまう。自らが拠って立つ基盤を頭から否定され，書物の中の世界を理想として叩き込まれた子供たちは，アンラシーヌマンの（根を張るべき）場所を求めて夢想の旅に出る。これが「世界を説明すること」を目指した『アンセルテーヌ号に乗って』という作品に，現実と夢想が交錯するゆえんだ。ジャン＝クロードもカミーユも，身近な現

実から確実なものの断片を一つ一つ拾い上げ，世界の理解を深めていくという手段を，硬直したフランス式の教育によって断たれてしまった存在である。

2．ナンディーヌ族の場合

カナック人は，本来，万物の起源としてのグランド・テール（ニューカレドニア本島）の大地に根ざすことを望んでいる。第2章Ⅲに描き出されたマラマの谷の平穏な生活は，自然と共存して生きるカナックのあり方をよく示していると言えるだろう。一方，ナンディーヌ族は先祖伝来の土地を追われたさまよえる民である。

『アンセルテーヌ号に乗って』はあくまでフィクションであるが，史実にのっとっている要素もある。1878年，アタイ酋長を指導者としたカナック人の大蜂起がそれだ。小説では，反乱の鎮圧後，ナンディーヌ族の部落は地図上から抹殺され，村を再建することはヌメア当局に禁じられている。かつての住人たちはマラマ族の村で暮らしながら，ナンディーヌの復活を模索している。

第1章Ⅳでは，マラマの王族の末裔テアンを囲んでナンディーヌ族の正統なる族長クラと老占い師ラ・ゲールが語る。

> Retrouver Nemdine, c'était retrouver la vie perdue. (...) Il fallait retrouver la terre des ancêtres, reconstruire la tribu, se remettre en accord avec les puissances de la terre et des airs, continuer la vie selon la loi. (42)

ナンディーヌを追われるということは，単に住むところがなくなるというだけではない。何千年も同じようにつづいてきた暮らし方そのものが失われるということだ。先祖の魂や，土地の精霊との結びつきが失われるということだ。先祖の土地をもう一度見つけ出して，部族を復活させなくてはならない。大地や空気のもつ様々な力と調和し，自然の掟にしたがって生きなくてはならない。

そして族長クラがナンディーヌの失地回復を誓う。

> Koulah, le chef, avait juré à ses guerriers de les tirer de l'horreur pire que le néant où ils vivaient, de leur rendre l'asile perdu où chaque chose reprend son nom et sa signification. Être à Nemdine, c'était bon et c'était vrai. Ne pas y être, c'était rien du tout. (42)

ナンディーヌ族にとって，ナンディーヌの土地に存在することこそが良いことであり，

真実なのであって，他所にあってはすべてが無なのである。しかも，ナンディーヌにおいてはあらゆるものが名前を取り戻し，意味付けられるというクラの演説は興味深い。自然と密接にかかわりあっているカナックの世界観がここに凝縮されていると言ってもいいだろう。

このように，ナンディーヌ族を中心に，カナック人たちはナンディーヌ村の再興を願っているが，一人一人の思いは微妙に異なる。サヴィニャン氏を通じてヌメア当局との交渉に望みをつなぐ正統な族長クラ。団結と蜂起を呼びかける北部の戦士とそれに同調する老呪術師ビア。ナンディーヌ族の老占い師ラ・ゲール（フランス語名を冠せられている点もデラシネの証しだろう）も主戦論者だが，マラマ族のビアとは反目し合う。マラマ族の若い後継者テアンは，迷った末，敗者としての生き方を甘受しようとする。

第2章　アンラシーヌマンとデラシーヌマン

フランスから持ち込まれ移植されたアーモンドの木（第4章）は，サヴィニャン一家の象徴だ。ニューカレドニアの気候では冬の休息期間がないために，花をつけるばかりで実を結ばない。元気をなくしていたアーモンドの木に生気を取り戻させたのは，自然に詳しい中国人のタムだった。一方，物語の登場人物たちは，どこに根を張り，どうやって花を咲かせ，どのような実を結ぶべきなのだろうか。それぞれのアイデンティティー探求に，植物がどのようにかかわっているかを具体的に見ていくことにしよう。

1．カミーユの庭

子どもたち二人はこの庭にニューカレドニアの森を再現したいと望んでいる。

二人が移植し，大切に育てている植物は，周りの者たちにはすこぶる評判が悪い。その理由は単純だ。それらの植物が土地のもの，ニューカレドニアに自生しているものであって，フランスから持ち込まれた園芸品種でないからだ。その辺の森へ行けばいくらでも目にすることのできる野生種など，わざわざ庭で育てる必要がないというわけだ。だが，カミーユもジャン＝クロードも，他人の批判を気にもとめない。それどころか，川辺に生えるような植物までも，なんとかして移植したいとさえ望んでいる。

カミーユは周囲の軽蔑の対象となっている自生種の植物に，実によく精通している。しかし，その名前についてはあまり頓着していない。ブルッスでの生活にあまりうまく溶け込めないヴァンカロンが，そんな植物のひとつに興味を持って，カミーユにその名前を尋ねるが，カミーユは，「弟ならカナック名を知っているわ。でも私は忘れちゃった」とそ

っけない。むしろ，安易に名前をつけることによって世界を分節化し，理解した気になることを拒んでさえいるようだ。一方で，あらゆる堅木を「カシ」と呼んで済ませてしまうヨーロッパ人入植者に対する反発もあるだろう。多少似ているからと言ってヨーロッパの植物名を借用して安心するような態度はカミーユの流儀ではない。命名し，分類することよりも，匂いや色，形，手触りなどによって植物に親しみ，樹液の流れから生の鼓動を共感することのほうが，はるかに重要なのだ。

> Rien d'elles [plantes] ne lui [Camille] était étranger, elle les connaissait par toutes leurs fibres, la senteur et la couleur de leurs fleurs, l'impression tactile de leurs feuilles, ou soyeuses ou épaisses, ou lisses ou pelucheuses, dentelées ou fines comme des chevelures. Le mouvement de la sève qui les faisait vivre avait pour elle la clarté limpide d'un courant d'eau vive et elle sentait comme sous son pouce la vigueur de chaque nervure hardie. Et aussi leur odeur, ou joyeuse, ou de maladie, ou de santé, ou de mort. (122～3)

この点において，カミーユとヴァンカロンの間には大きな隔たりが存在する。変わり者だという評判のヴァンカロンがカミーユの植物に興味を示したことで，彼女が親近感を抱いたとしても，ヴァンカロンは依然，他の入植者と同じように，ニューカレドニアの自然の上っ面だけをなでているに過ぎない。他方カミーユは，植物を理解，経験することを通じて，自らもニューカレドニアの大地に根ざそうと試みているかのようだ。このときカミーユが植物と共有する経験は交感的（sympathique）で，あたかも人間同士の付き合いであるかのようだ。

さらに言えば，もともとカミーユは言葉による桎梏から自由であるという傾向をもつ存在である。たとえばダルヌの家を訪れて留守だったとき，炭で壁にメッセージを残すことをあえてしなくても，ダルヌがカミーユたちの来訪を悟るだろうと信じていた。マリオッティにおけるエクリチュールの意味を論じたジューヴ論文[6]によると，書くことはフランス式教育の産物であり，書かれた世界によって疎外がもたらされるという。カミーユは書かれなかった，言葉にされなかった世界に重きを置こうとする。これが疎外を克服する手段のひとつである。

2．ジャン＝クロードとゴムの実

第５章Ⅱでは，小学校からの帰り，ジャン＝クロードはいかにもおいしそうな実をたわわに付けたゴムの木を見つける。しかし，見かけとはうらはらにゴムの実はまずい。とこ

ろがジャン＝クロードは，カナックの伝承によればゴムの実は食べられるのだと勝手に思い込んでいて，なんとかゴムの実をおいしく食べてみたいものだと性懲りもなく試食してみる。

ゴムの実は，アンセルテーヌ号と同じく永遠の憧れを象徴しているようにも見える。しかし，アンセルテーヌ号が理想のヨーロッパへと船首を向けているのに対して，ゴムの実の魅力は，あくまでカナックの森に裏付けられたものだ。何度失敗してもジャン＝クロードがめげないのは，自然に精通しているカナック人ならなんとかしてゴムの実を食べる方法を知っているはずだという一種の盲目的な信仰による。こうしてゴムの実は，自然の奥に隠された「秘密」をほのめかす。

Certes! on avait discuté du secret et tenté de le retrouver. (141)

自然はそれに精通していない者にとってはほろ苦いが，勘所を心得たものにとっては蜜の味となる。たとえばカナックジャガイモのように，そのままでは毒であっても，適切な処理のしかたさえ知っていれば滋味に富む食べ物となるにちがいないと信じ込んでいるのだ。カナック人でも普通はゴムの実など食べやしないと，当のカナック人であるテパタに教えられても，白人には秘密を明かさないのだと理屈をつけて，ジャン＝クロードは自説を曲げようとしない。ゴムの実への固執は，ニューカレドニアで根を張って生きていこうとするジャン＝クロードの意志の現れだ。ゴムの実の「秘密」をつきとめることは，ダルヌやベルトランのようなニューカレドニアの自然に適応した賢明で逞しい入植者と同列に並ぶことを意味する。

Il allait enfin pouvoir être « celui qui sait. » (140)

ジャン＝クロードは，つねづねダルヌのような完成されたストックマン（牧場経営者）になりたいと願っている。気性の荒い馬も乗りこなしたいし，銃も持ってみたい。また，様々な智恵や技を身につけているカナック人は，ジャン＝クロードにとって英雄に等しい尊敬の対象となる。カナックの郵便配達人テパタの投げ槍の技に驚嘆し，「カナック人の子どものようだ」とブビニャン先生にしかられても，かえってそのたとえを誇らしく思う。ゴムの実をおいしく食べる方法を見つけ出すことは，ニューカレドニアの自然に適応して生きるためのイニシエーションであるかのようだ。

ジャン＝クロードはゴムの実を，グランド湾で食べたリンゴの実（第７章Ⅶ）になぞら

える。リンゴの実は，ジャン＝クロードの父親のサヴィニャン氏や叔父のチビュルスにとっては，祖国フランスへの郷愁を喚起するものだった。一方，パイナップルやマンゴーやパパイヤの味に慣れて，リンゴなど食べたこともないジャン＝クロードにとって，それは異国情緒の源泉であり，遠い理想の国を身近に現前させる魔力を宿している。しかしゴムとリンゴは対照的だ。甘酸っぱいリンゴの理想と，吐き気を催させるゴムの現実。ジャン＝クロードは両者の間で揺れている。

3．ランタナの無限空間

第4章Ⅶ，Ⅷにはベルトランの家の廃墟に茂るランタナのエピソードが登場する。

マンゴーやオレンジやミカンやタマリンドといった木々がブルッスの中で緑の島を形作る。これらの木々の存在はかつてそこに人が住んでいたことを示している。この放置された緑の島に繁茂するのがランタナだ。頑健で生命力の旺盛なランタナは，木々に取り付き，覆い被さり，やがては緑の島全体を埋め尽くす。

このランタナの茂みはひとつの独立した宇宙を形成するものだ。カミーユとジャン＝クロードは，ある時この茂みの中にトンネル状の通路になっている部分を見つけていた。この低いトンネルをくぐっていくと，背が立つくらいにぽっかりと開いた空間にたどり着く。まるで巨人が気まぐれに作ったランタナとツタの籠細工（un immense ouvrage de vannerie tressé par un géant épris de fantaisie）のようだ。

この小宇宙へ入り込むと，二人は自分たちが住んでいる家からほど近いところにいるのだとはとても思えなくなる。この体験はまず時間と空間への果てなき沈潜として認識される。

> Cette plongée sous les lantanas leur paraissait être une plongée interminable dans le temps et dans l'espace. (158)

「沈潜（plongée）」という単語に呼応するように，この無限の空間は，「目がくらむような墜落（la chute la plus vertigineuse）」として体験される。子供たちにとって，これはアンセルテーヌ号での旅とはまた違った種類の「陰鬱な旅（voyage sombre）」でもある。いずれにせよ，このランタナによって作られた「魔法の茂み（bosquet enchanté）」において，子供たちは漂う存在である。

ついで，この「逆さまにされた巣（nid renversé）」は，一種の胎内回帰，幼児がえりとしても経験される。ジャン＝クロードとカミーユは，巣の中でヒナが親鳥から餌を与えら

れるように，居ながらにして果実を味わうことができる。そして二人は，この安全な場所で，「まさしく（absolument)」子どもであることができるのだ。

Mais plus que tout, ce lieu était leur domaine, leur retraite, l'endroit où en toute sécurité ils pouvaient être absolument enfants sans avoir jamais à redouter l'ironie. (160)

さらにこの，純粋無垢な生が育まれる巣は，死とも隣り合っている。かつてこの地を開墾し，ブルッスを知り尽くしたベルトランの墓がすぐそばの草藪の中に埋もれているのだ。まだ死というものを実感できない二人にとって，土の下に眠るベルトランの身体は，この土地の遠い過去や記憶，伝説へと結びつける架け橋となる。

Cela les rattachait aux pays des longs passés, aux pays des souvenirs, des morts que l'on chérit, au domaine de la légende. (162)

このように，ブルッスに出現した緑の島のランタナの茂みは，時空間を超越したひとつの宇宙を形作ると同時に，そこでの「旅」を通じてジャン＝クロードとカミーユは，生と死を身近に経験する。どこか通過儀礼にも似て，二人はこのランタナの小宇宙でニューカレドニアの大地との絆を体感するのだ。

ところが第５章Ⅸでは，ベルトランの息子が十数年の歳月を経て帰ってくる。藪を切り開き，家を再建するが，これは同時にひとつの宇宙を破壊する行為であったことにベルトランの息子は気付いていない（終章)。

Le fils de Bertrand ignorait que cette restauration avait détruit un univers. (241)

結局土地に根付くことに失敗したベルトランの息子はまたどこかへ姿を消す。彼は所詮「不器用な入植者」にすぎなかった。不器用とは，植物や自然の意味を読み解けない者の謂いであろう。

4．テアンとヤシの実

費やされた言葉の数こそ少ないが，植物が人間のアイデンティティーの拠り所となる典型的な例は，第８章Ⅵに出てくるテアンとココヤシのエピソードだろう。

ナンディーヌ族の失地回復は，小説に登場するカナック人たちの懸案事項である。

1878年の大蜂起以来，ナンディーヌの村は地図上から抹殺され，立ち入りを禁じられている。

歴史的に見れば，ニューカレドニアの先住民であるカナック人と白人入植者との軋轢は，白人の放牧地がカナック人の先祖伝来の土地を侵蝕することで，先鋭化する。大蜂起のきっかけも，やはり両者の土地利用の問題だった。『アンセルテーヌ号に乗って』においてもダルヌの追いかける青牛が，囲いを破り，カナックの土地を荒らす存在として疎まれるが，この青牛は，歴史的な土地問題を象徴しているとも言えるだろう。

白人の入植者は，先住民のカナックが土地に刻んだ物語をまったく無視して鉄条網を張り巡らし，牧畜を始める。

> Les lieux consacrés et réservés aux cérémonies étaient traités comme n'importe quelle vallée ou n'importe quelle colline. (237)

一方，カナック人にとって，土地は単なる面積の単位に還元し得ない豊かな意味を担っている。とりわけ樹木に込められた意味は重要だ。カナックの伝統文化（テア・カナケの物語）の文脈においては，人間の一生は五つのステージに分かれ，それぞれのステージにおいて様々な植物に象徴的な意味を見出している。正統な族長の一人であるテアンは，カナックの未来を決定しかねない重要な決断をせまられた集会の折，「他人」の地所に入り込み，ココヤシの木から実を取ってくる。

> Ces cocotiers avaient été plantés pour son père le grand chef. (237)

このココヤシの木は，今でこそドーチエの所有地に囲い込まれ，立ち入ることを禁じられているが，もとはと言えば，偉大な酋長だったテアンの父親のために植えられたものだった。しかもそのココヤシが生えているフォー川の河口は，さまよえる死者の魂が憩う場所でもあった。

テアンは法を犯してココヤシの実を取りにいくことにより，時間を遡り（il remontait jusqu'aux époques — proches encore），自らのアイデンティティーを再びカナックの大地に根付かせようとする。そのそれほど遠くない過去において，人々が従って生きた法とは，戦士の法であり，戦いに勝った者が欲しいものを手に入れるという単純明快な論理にもとづいていた。ここでカナック人が団結して蜂起すれば，またその輝かしい英雄の時代が再現できるかもしれない。

しかし，結局，テアンは自分が白人に対する敗者であることを認め，ある種のあきらめの境地に達する。彼をココヤシ取りに駆り立てた一時の激昂は，どこかへ消え去ってしまった。

5．リンゴあるいは南洋杉

ジャン＝クロードとカミーユは，アンセルテーヌ号をよすがに理想の世界へ旅立とうと夢想するが，その世界は不確実ではかない。フォー川で実際に齧ったリンゴの実は，その味によって直接官能に訴えかけ，書物の中でしか垣間見ることのなかった理想の世界フランスを一気に現実化してみせるほどの強い喚起力を持っている。しかし，ジャン＝クロードとカミーユの身体的現実は，むしろニューカレドニアの森へと調和的に寄り添っていく。たとえば第２章Ⅲにおいて父と一緒にマラマの村を訪れたジャン＝クロードとカミーユは，中央山脈の森が形作る緑の天蓋の魔力（la voûte magique de la forêt de la Chaîne）に気おされて，リンゴやナシやサクランボや小麦といった異国情緒と決別する。

> Camille et lui [Jean-Claude], sous l'emprise de la haute forêt, ne rêvaient plus de transformer le paysage, de remplacer les essences connues par l'exotisme des pommiers, des poiriers, des cerisiers et du blé. (59)

自然と調和した昔ながらの姿をとどめるマラマ村の風景は，アンセルテーヌの夢想から二人を呼び覚まし，荒々しく力強い現実へと引き戻す。

> Jean-Claude et sa soeur sentirent étrangement en entrant dans cette vallée qu'ils avaient abandonné l'*Incertaine.* Pour toujours, crurent-ils. Pour toujours.
>
> Ils portaient en eux ce paysage âpre et fort. Le silence profond élargissait leur être aux limites de l'infini, le dispersait et donnait un vertige triste. (60)

この風景の肌ざわりによって，ジャン＝クロードやカミーユは，自分たちの存在を無限に拡大するような目まいを感じた。さらには，ココヤシや南洋杉の木が直接身体とつながっているような感覚にもとらわれる。

> Cet assemblage de feuilles brillantes et cliquetantes des cocotiers et des hautes flèches funèbres des pins colonnaires était un composé directement allié à leur chair. (60)

マラマの村の自然や風景は，アンセルテーヌ号に象徴されるような理想の異郷への脱出願望と対置された，動かぬ現実だ。それは時間の流れの中にしっかりと刻み込まれている。そこはワッチューマもいるカナック文化のイニシエーションの場所でもある。

こうして理想と現実，明と暗，動と不動の間を揺れ動きながら，アンセルテーヌ号の物語はひとまず幕を閉じる。ニューカレドニアの自然の中に自らのアイデンティティーを探求していく物語は，ポワンディ三部作によって展開されるが，この点に関しては稿を改めて論じることにしたい。

第3章　不吉な動物たち

植物が，ジャン＝クロードやカミーユを中心として，登場人物たちをグランド・テールの大地にひきつけ，自然と調和させ，根を張る方向に向かわせるものであるとすれば，一方で，『アンセルテーヌ号に乗って』に描かれる動物は多くの場合，人間を翻弄し，不幸をもたらす存在だ。

たとえばダルヌが追い求める青牛。すでに触れたように，この青牛はカナック人にとっては悪魔のような存在（animal diabolique）であり，先祖伝来の土地を単なる放牧地に変えてしまう粗暴で侵略的な白人入植者の振る舞いを象徴するものであった。

> La Guerre dit enfin à Darne qu'il fallait tuer l'animal diabolique. Aucune barrière ne l'arrêterait jamais. Oui, il fallait le tuer! (35)

この呪われた牛（taureau ensorcelé）は殺してしまう以外に方法はない，というラ・ゲールの言葉の裏には，自分たちの土地をどこまでも侵蝕してくる白人たちに対する武力による抵抗の意志がのぞいている。

同時に，カミーユは，この青牛の中に，ダルヌへもたらされる不幸の前兆を見出していた。この不吉な予感は，理由のないものではない。カナック人たちは，悪魔が宿っている青牛のみならずダルヌまでも，多くを知りすぎたとして，殺すことを考えている（第1章Ⅵ）。ひそかにダルヌに想いを寄せるカミーユは，ダルヌが青牛の角にかかって死ぬ場面を思い描き，心配でならない。

あるいはジャン＝クロードが遊び半分に殺したタツノオトシゴ。その直立の姿勢からどことなく人間にも似たはかない命を気まぐれに槍で突き殺してしまったジャン＝クロード

は，突然恐怖にとらわれ，えも言えぬ生の不安を感じる。

Il y eut alors un grand vide. Le monde lui [Jean-Claude] parut immense, sans bornes, désolé. (65)

この空虚感は，どこかに繋がろうとしても何も手がかりのない無限の世界にふいに突き落とされたときの苦悶にも等しいものだろう。ジャン＝クロードが自分の周囲を取り巻いていると感じた虚無の巨大さ（l'immensité du vide qu'il avait senti autour de lui）とは，デラシネの極北を垣間見た戦慄かもしれない。

さらにはダルヌが透きとおる海の底から持ち帰ったサンゴや法螺貝。ダルヌはカミーユへのプレゼントとして，形の良いものをわざわざ探し出して取ってきたのだが，なぜだか逆にカミーユの怒りをまねいてしまう。せっかくの贈り物を即座に海へ捨ててしまえと邪険に拒絶したカミーユは，この自分の振る舞いがダルヌの失踪を招いたのではないかと，後に自分を責めることになる。

このように，動物たちは，事あるごとに登場人物たちを翻弄し，対立し，不安に陥れる。唯一の例外は第７章Ⅵに出てくるミドリバトだろう。ハトはサイクロンにもてあそばれ，生息地であるイル・デ・パンから遠く離れたオーストラリアまで風に乗って飛ばされてしまうこともあると，ジャン＝クロードは語る。しかしその一方で，ジャン＝クロードは，もしかりに自分がハトになったとしたら，けっしてサイクロンなどの意のままにはならないと主張する。

D'abord, moi, si j'étais un pigeon vert, je ne me laisserais pas entraîner par le vent! Je m'accrocherais aux branches, je marcherais par terre, comme les poules, je me mettrais à l'abri d'un trou, je m'agripperais avec le bec et les pattes. Le vent ne m'emmènerait pas où il voudrait! (204)

強風にもっていかれないよう，しっかりと岩にしがみつくのだと，植物的なアンラシーヌマンを志向している点は，ことに興味深い。このジャン＝クロードの意気込みは，リンゴの実の魔力に取り付かれることなく，ニューカレドニアという「相続権を奪われた」土地で生きることを受け入れたというくだりに呼応している。

Ils acceptaient d'être des barbares deshérités, d'être nés au bout du monde, de ne pas

connaître la vraie splendeur, d'ignorer les grands temples construits en dentelles de pierre, les villes lourdes des rumeurs du passé, la seule beauté agreste : celle des toits de tuiles dans des champs bien entretenus. Ils acceptaient d'être perdus aux confins de la terre, dans un pays deshérité, et se sentaient bien dans la barque balancée par l'océan. Les palétuviers issus du limon leur étaient familiers, tout comme les roches de la rive sud. Ils acceptaient d'être enchantés par le bleu profond du Pacifique tout couronné de corail étincelant dans la chanson de l'alizé. (207)

結局ジャン＝クロードとカミーユは，慣れ親しんだマングローブや岩と一緒に，青いサンゴ礁の海を吹き抜けるアリゼの風に魅了されながら生きていくことを選び取るのだ。

おわりに

「私はとても自由に育った。庭の外はすぐブルッスで，その植物は，土地のお話を語って聞かせてくれた」とマリオッティは，*Pays des Niaoulis*, une emission radiophonique の中で証言している。マリオッティの創作の原点には，ニューカレドニアの自然や植物があると言っていい。

植物はその生活様式からしてアンラシーヌマン（根を張ること）が至上命題となる。アイデンティティー探求の物語である『アンセルテーヌ号に乗って』の登場人物たちが，植物の奥に自らの生と本質的に同質なものを見抜き，そこに生きるよすがを見出そうとしても不思議はない。一方，青牛やタツノオトシゴ，サンゴと法螺貝など，動物が不幸をもたらすもの，手におえないものとして登場してくることを考えると，なおさら興味深い。マリオッティの描く世界は，カナックの伝承の世界と似て，自然の諸物が人間の人生と密接に絡み合い，かけがえのない意味を帯びる。その中で植物は，単なる風景の飾りなどではなく，登場人物たちが求めるアンラシーヌマンのモデルとして，きわめて重要な役割を担っていると言えるだろう。そして，その植物は，テアンのココヤシのように，カナックの文脈においては，歴史や物語を語ってくれるものでもある。植物をはじめとして，多彩な自然が紡ぎ出す豊穣な物語については，ポワンディ三部作において，その豊富な例証を見出すことができるだろうが，その検証は別稿に譲りたい。

註

1）「全宇宙は絶えずさまざまな力の衝撃にさらされている。すべてのものは形とエネルギーを変化させ続ける。植物や石や動物と同じく，私たちも偶然と変形に他ならない。」（『たぶんすべては無駄なこと』p. 232-3）

2）B・ガッセ『ポワンディ物語』（1996）序文 p. 8

3）「僕は正真正銘のオセアニア人だ」（*op.cit.*, p. 205）と，マリオッティは表明している。

4）*op.cit.*, p. 11

5）『アンセルテーヌ号に乗って』（1996）からの引用はページ数のみを丸括弧で記す。以下も同様。

6）Dominique Jouve, « L'expérience et l'écriture de la multiculturalité dans l'oeuvre de Jean Mariotti », *in Multiculturalisme et identité en littérature et en art,* 2002.

参考文献リスト

[マリオッティの作品]

Jean Mariotti, *Tout est peut-être inutile*, Grain de Sable, Nouméa 1998.

, *Takata d'Aïmos*, Grain de Sable, Nouméa, 1999.

, *Remords*, Grain de Sable, Nouméa, 1997.

, *A bord de l'Incertaine*, Grain de Sable, Nouméa, 1996.

, *Contes de Poindi*, Grain de Sable, Nouméa, 1996.

, *La Tourterelle et le Corbeau*, Grain de Sable, Nouméa, 2001.

, *Nouveaux contes de Poindi*, Grain de Sable, Nouméa, 2002.

, *Le dernier voyage du Thétis*, Grain de Sable, Nouméa, 2000.

, *La Conquête du séjour paisible*, Grain de Sable, Nouméa, 2003.

, *Toghi*, Grain de Sable, Nouméa, 2003.

, *Sans titre*, Grain de Sable, Nouméa, 2001.

[関連文献]

François Bogliolo, *Gare l'areu*, Grand de Sable, Nouméa, 1995.

, *Paroles et écriture, Anthologie de la littérature néo-calédonienne*, Editions du Cagou, Nouméa, 1994.

CORAIL, *Migration(s) et identité*, Université Française du Pacifique, Nouméa, 1998.

Dimanche Matin (direction), *Sagas calédoniemmes*, tome 1, Journal Dimanche Matin, Nouméa, 1998.

Emmanuel Kasarhérou *et al.*, *Guide des plantes du chemin kanak*, Agence de développement de la culture kanak, Nouméa, 1998.

Association internationale de littérature comparée, Université de Polynésie Française, *Multiculturalisme et identité en littérature et en art*, L'Harmattan, 2002.

Musée de la ville de Nouméa, *150 ans de mémoire collective caledonienne*, Grain de Sable, Nouméa, 2003.

＊この論文は，平成15年度札幌大学海外留学制度により，筆者がニューカレドニア大学でおこなった研究の成果の一部である。